「家族の変様・住宅街のコミュニティ・継続性」をキーワードとして
「住宅にはどんな可能性があると考えるか、その時の設計のあり方」について
（800 字以内にまとめたテキスト）

「いえ」

家族の変容

既に「従来型家族」という言葉があるように、家族は血縁だけという考えは古い。例えば、ひとつの「居場所（家）」に集まる「人たち（族）」を「家族」と呼んでみたい。そして、その居場所を「いえ」と呼んでみる。（「家」ではなく、もう少し柔らかなものとして平仮名の「いえ」）
インターネットで誰とでも繋がることができる時代だからこそ、リアルな空間と居場所こそが人の繋がりを生むはずである。

住宅街のコミュニティ

私は石川県の小さな村で育った。村には小さな駄菓子屋さんがあった。店のおじいさんが住んでいる家の隣にあり、入口の引き戸は、暑い日も寒い日もいつも開いていた。そこではこどもが宿題もするし、近所のおじさんがたわいもない話もしに来る。それは、そこに行けばいつもの誰かがいてくれるという幸せだったのだと後になって気づいた。だから、私にとって、住宅街、自分が住んでいる街におけるコミュニティとは、「いつもそこに行くと誰かがいてくれていて、ふと立ち寄れるように、いつも開かれていること。」であり、そういう居場所があること自体が、そのまちに、コミュニティを育むと考えている。それは、まさに私の理想とする「いえ」である。

継続性

私が高校生になるころ、駄菓子屋は閉店してしまった。駄菓子はなくなったけど、その建物は、オープンな半屋外のバス停になった。そして、その脇にあった小さな花壇や庭には、変わらず思い思いに村の人が花を植えたり、子どもたちが秘密基地をつくったりしていた。それは、今も続いている。居場所に誰もが参加できる開放性があること、それは、時代を超えて受け継がれるはずである。
私は、自分のこの体験から離れることはないこの駄菓子屋さんのように建築をつくりたい。そして、設計という行為も開き、みんなで行うことで、時代を超えたものをつくりたいと考えている。

そこには、人間らしい瑞々しさが生まれるだろう。

南 俊允
（796 文字）